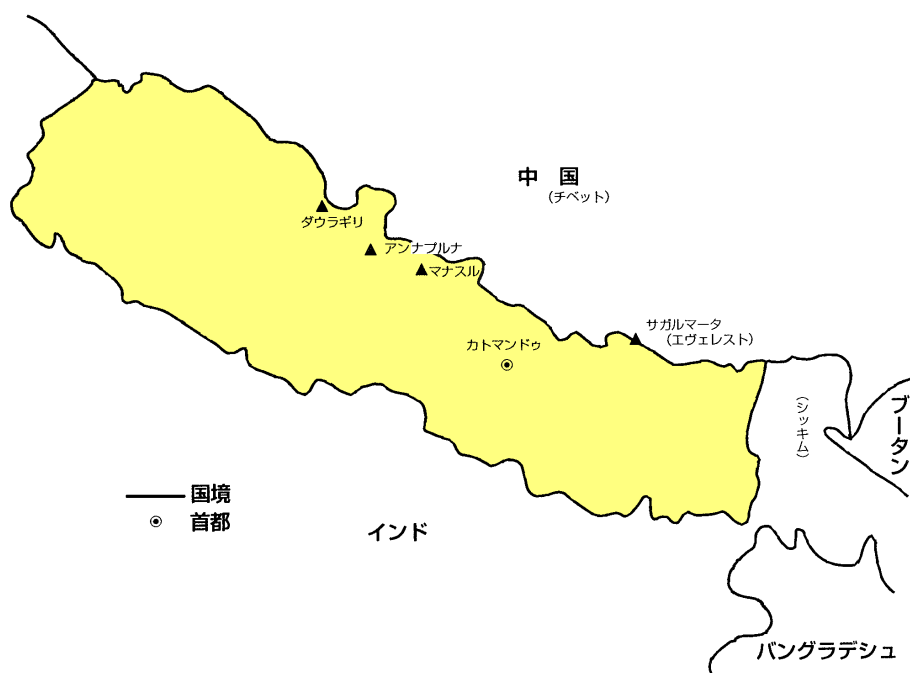


ネ パ ー ル 王 国



〔出所〕『アジア動向年報』アジア経済研究所

1. 面積	積	14.7万km ²
2. 人口	口	2,280万人(98年)
3. GDP	P	50.2億米ドル(98/99年)
4. 一人当たりGDP		210米ドル(98/99年)
5. 経済成長率		3.4%(98/99年)
6. 物価上昇率		12.8%(98/99年)
7. 失業率		4.9%(97年)
8. 通貨		ルピー
9. 為替レート		1米ドル=68.7ネパール・ルピー(99年12月現在) 1ネパール・ルピー=1.5円
10. 貿易額	輸出入	輸出 363億ルピー(98/99年) 輸入 875億ルピー(98/99年)
11. 外貨準備高		542百万SDR(98年末)
12. 財政規模	予算額	494億ルピー(96年)
	対GDP比	19.9%

〔出所〕政府資料、IMF資料、外務省資料等

第2節「社会構造と社会変容」：ネパール

秀明大学国際協力学部 教授

結城 史隆

1. はじめに

ネパールの状況を考えていく上で重要なキーワードとして、「複雑な自然生態系」、「内陸国」、「多種多様な人種・民族」、「インド文明の辺境」、「貧困と援助」の五つが挙げられる。

1番目は、ネパールは小国だが自然生態系が非常に複雑で、猛暑のジャングルから万年雪、氷河地帯までであるということ。2番目は、経済的に大きな意味を持つが、内陸国であること。海に出るにはインドを通過しなければならない。3番目は、ネパール国民は人種的にも民族的にも多種多様で、複雑に入り組んで居住していること。4番目に、文明論的にはインド文明の辺境にあるということ。ヒンズー教やカースト制度などの影響を強く受けている。最後にネパールというと「貧困」というイメージが強く、国際援助や協力の場となっていること。そのことが地域社会にも大きな影響を与えている。

これらの点を考慮に入れながら、社会構造を中心にネパールの状況を考えていく。

2. 地勢と人口

ネパールは日本の国土面積の4割にも満たない小さな王国であるが、ヒマラヤ主峰の南斜面に位置しているために、自然環境や生態系は非常に変化に富んでいる。植生や栽培作物も地域によって異なっており、人々はその環境に適応した生活様式を生み出してきた。

地勢・生態系は帯状に、大きく三つに分けられている。南のインド国境と接している地域は、南部タライ低地と言われ、標高100~300mくらいの平野が広がっている。亜熱帯気候の下でジャングルが広がっており、元来はマラリヤなどの疫病が蔓延している地域であった。1960年以降はマラリヤの撲滅運動が効果を上げ、農業地域として開拓が進むことによってネパールの穀倉地帯と呼ばれるようになってきている。

マハバーラト山脈からヒマラヤ主脈までの地域は、中間丘陵地帯と言われ、温暖モンスーン気候のもとで、日本でも見られるナラ、シイ、カシなどの照葉樹林帯が続いていた。しかし、人口増とともに開墾が進み、山の斜面には広大な階段耕地が築き上げられた。水利の良いところは棚田に、悪いところは段々畑として利用され、高低差が1,000mもある地域も存在する。

北のチベットとの境に沿う北部山岳地帯は、寒冷高山気候で、元々雑穀を中心とした零細農業と牧畜、あるいはチベットとの間の交易などが人々の生活を支えてきた。現在ではヒマラヤ・トレッキングの中心地として観光開発が進んでいる。

図表 1 は総人口の推移を示したものである。1930 年代から 1940 年代までは、500 万～600 万人くらいの間を上下していた。人口が爆発的に増加したのが 1970 年代で、そのころの年増加率は 2.66%にも達した。その結果、1980 年代に入ると 1,500 万人を超え、その後増加率は少し鈍るが、1991 年には 1,800 万人を突破している。そして、現在では 2,200 万人を超えると推測されている。

しかし、人口密度は極めて偏っており、高密度はタライ平野の東部に集中している。中間丘陵地帯で人口が集中しているのはカトマンズ盆地だけで、全体的に丘陵地帯、山岳地帯は非常に人口密度が低い。日本ではネパールというと、ヒマラヤを背景に我々と同じような顔をしたモンゴロイド的な人々がのんびり暮らしているようなイメージがあるが、ネパール全体でみると低地の亜熱帯地域に人は集中している。

3 . 民族

ネパールの人種と民族は多様性に富んでいるが、二つのグループに大別できる。

一つが国土の南から西にかけて多く住んでいるインド・ヨーロッパ語系の人々であり、もう一つが東から北にかけて住んでいるチベット・ビルマ語系の人々である。インド・ヨーロッパ語系というのは地中海まで続いていく大きなグループであり、チベット・ビルマ語系というのはモンゴロイド系の人々である。この二つの異なるグループに属する人々がたまたまヒマラヤの南面斜面に住んでいたのであり、そこに 250 年前に国家ができて結果として一つの国民となった。

インド・ヨーロッパ語系の人々は更に二つに分かれ、まず、タライ低地に住んでいる人々がいる。図表 2 にあるタルーとかラジバンシというのは、いわゆる先住民と言われている人々で、そのルーツや言語帰属に関しては諸説がある。彼らは全人口の約 6.7%にすぎない。後はインド・ヨーロッパ語系で、国境を挟んだ北インドのビハール州の人々と近いマイティリ語やボジプリー語など使用している。元々地続きである上に、シャハ王朝がタライ地域に領土を拡大していったときに、労働力としてビハール地方から連れてこられた人々の子孫も多い。インドとネパールの国境は、両国の人々がパスポートなしで自由に行き来できる。したがって、国境の町ではインドの子供たちがネパールに遊びに来たり、結婚

相手を向こうで探したり、相手の国で仕事をしたりしている人も多い。

丘陵地帯のインド・ヨーロッパ語系の人々はパールバテ・ヒンドゥー（山のヒンズー教徒）と一般に言われ、現在国語になっているネパール語を母語としてきた。元々西の方面から様々な時期に移動し、10世紀くらいまでにはネパールに定着したと思われる。さらに、インドへのイスラム教徒の侵攻によって、インドからヒンズー教徒の一部がネパールに逃れてきた。彼らは政治的難民のようなものであったが、ヒンズー教の深遠な教義、カースト制度のような複雑な社会制度、更に稲作を始めとする高い生産技術を持っており、地元の人々と交わりながら地歩を固めていった。ネパールの近代国家建設の中心となったのは、このパールバテ・ヒンドゥーの上位カーストの人々である。

一方、チベット・ビルマ語系の人々も二つのグループに分けることができる。一つは中間丘陵地帯に住んでいる民族で、ライ族、リンブー族、タマン族、ネワール族、グルン族、マガール族などが代表的なものである。元々仏教や土着宗教を信仰していたが、現在ではヒンズー教を取り入れ、国語のネパール語を母語としている人が増えてきた（図表2）。ネパール語の浸透度は民族によって大差があるが、ネパール語化とヒンズー化はある程度の相関性があり、ネパール語を受け入れている人々の方が、ヒンズー教徒のやる祭礼や儀礼を積極的に取り入れている傾向がある。

もう一つのチベット・ビルマ語系の人々は、登山やトレッキングのガイドで有名なシェルパ族を代表とするヒマラヤの民族である。元々ネパールよりもチベット文明とのつながりが非常に強く、現在でもチベット仏教を信奉し、チベット服を着ている人が少なくない。ただし、1960年代からチベットへは簡単に行けなくなったので、カトマンズやインドとの関係が強くなってきた。シェルパ族の中には日本人の登山家や観光客と親しい人も多いが、国民全体の人口からみると0.7%と極めて少数の民族である。

4. 社会構造 - ネパール丘陵地帯のカースト制度

ネパールの社会構造の大枠を理解するためには、「ジャート」という用語が重要である。ジャートはインドの「ジャーティ」からきた用語である。ジャーティはカースト制度の四つのヴァルナ内部にある「生まれを同じくするもの」の集団で、内婚や世襲職業、共食規制などの社会的機能をもっている。しかし、ジャートはジャーティよりも広い意味で使われる。もちろん、同じ内容を示すときもあるが、ヴァルナを意味するときもあれば、更に民族や国籍にも使われることもある。例えば、タマン族のジャートは「タマン」になるし、

私たちのジャートは「ジャパニ」(日本人)と答えるしかない。つまり、ジャートはジャーティを単に意味するだけでなく、民族を含めた帰属やアイデンティティを示す枠組を与えるものであり、ここにネパールの社会構造の複雑さの一つが見られる。

ネパール中間丘陵地帯のカーストは、前述したパールバテ・ヒンドゥーの人々が中心になっている。インドのヴァルナと対応させると、ブラーマンに相当するのがバフン、あるいはブラーマン、クシャトリヤに対応するのがチェトリで、この二つがいわゆる聖なる紐を体につけている上位カーストになる。

このような上位カーストは、最下位に位置する職業カーストなしには生活することができない。農具を制作したり服を仕立てるような穢れた仕事は、ブラーマンやチェトリにはできないからである。このような職業カーストは、ネパールでは「パニ・ナチャルネ」(水を受け取ってもらえない人々)と呼ばれている。パニは水のことで、穢れを浄化する力のある水でさえも受け取ってもらえないという、ある意味の「不可触民」となっている。インドにおいては職業カーストの種類が非常に多いところがあるが、ネパールの丘陵地帯では少ないことが一つの特徴になっている。どこにおいても見られるのは、仕立て屋(楽隊を兼ねる)、鉄鍛冶屋、皮革屋の3種類くらいのものである。

一方、インドにおけるバイシャに相当するものとして、ブラーマンたちはチベット・ビルマ語系の民族を考えている。「彼らはブラーマン・チェトリほど聖なるものではないが、職業カーストほどは穢れていない」というわけである。すなわち、インド・ヨーロッパ語系のブラーマン・チェトリを上位に、職業カーストを最下位とし、その間にチベット・ビルマ語系の人々を挟みこんでカースト体系を作り上げてきたのであった。

村落の中では異なるジャートはできるだけ接触しないようにしている。相手の家を訪問して上がり込んだり、いっしょに飲食をすることはない。しかし、常にサービスを交換しあっている。接触しないが交換するというかたちで、彼らはお互いの関係を維持している。例えば、農民はどこのブラーマンにお祭りをしてもらい、どこの鍛冶屋に農具を作ってもらい、どの仕立て屋に服を作ってもらうかは、祖先代々世襲的に決まっている。農民はそれらのサービスに対して、反対給付として米を提供する。ジャートの間には非接触でありながら、世襲的に決まった相手とサービスやモノを交換しあうというのが、現金経済が入ってくる以前の丘陵地帯農村の一般的なモデルである。

ネパールのカースト制度を複雑にしているもう一つの要因はネワール族である。彼らはカトマンズ盆地で都市文明を築いてきた特殊な民族で、その言語はチベット・ビルマ語系

に属する。そのためにパールバテのブラーマンたちは彼らのことを一般にバイシャ相当と認識している。しかし、ネワール族自体は独自のカースト制度を持っており、最上位はヒンズー教のブラーマンと仏教の祭司となっている。釈迦はカースト制度を否定したが、ネワール族の金剛乗仏教にはカーストがあり、出家した僧侶がいない代わりに儀礼を行う祭司がいる。そこでネワール族の上位カーストは自分たちをブラーマンと相当と考えるという、全体論との認識の食い違いがおきている。

ネワール族の上位カーストの下には、クシャトリヤに相当するような人たちやバイシャに当たる農民カースト、更に最下位の職業カーストもいる。ネワール社会にはこの職業化カーストの種類が多い。これは彼らが都市文明を担ってきたことと無縁ではない。このように、ネワール族はネワール的な独自の世界をもっている一方で、ネパール全体の中ではバイシャ相当と考えられるという、複雑な入れ籠構造の様相を示している。

5. ヒマラヤ農村の社会変容

現在ネパールの山岳地帯の農村がどのように変容していったのかを、具体的事例の中から検討していきたい。

1991年より国立民族学博物館を中心に、エベレストのあるソルクンプと呼ばれる地域で合同調査を行ってきた。参加者は社会科学系から植物学、自然地理学など自然科学系まで含めた総合調査で、ヒマラヤ山岳地帯の「環境誌」を描き出すことを目的としていた。ソルクンプはシェルバ族の領域だが、更にソルとクンプの二つの地域に分かれる。エベレストのあるクンプ地方は古くからチベット交易が盛んで、現在では観光産業が非常に発達している。私たちの調査地のあるソル地方は、寒冷気候の中で標高2,700mの集落を中心に、3,000mくらいまでは常時人が住んでいる。

彼らの生活を支えてきたのは、零細農業と牧畜である。農作物はシコクビエやソバ、それに大麦などの雑穀類にジャガイモが中心で、その他に半栽培の食物が見られる。半栽培というのは、自ら種をまいたりしないが、刈り取った後の畑に自然に生えてくる植物をうまく利用するのである。例えば、花の咲くサトイモの原種のようなものがあって、それをうどんのようにして食べる。半栽培というのは農業の歴史や環境の利用法という面から、かなり重要な意味をもっていると思われる。

牧畜は移牧と呼ばれるもので、ヤクやヤクとウシの交配種を、夏になると4,000mくらいまで連れて行き、冬になると2,700から3,000mの集落のあるところまで下ろして飼育

するという方法をとる。以前は盛んだったが、牧畜に従事する人の数はだんだんと減ってきている。

農業と牧畜だけでは生活を支えていくことができない場合、様々な形で外部の経済とつながって生計を立ててきた。1950年代まではチベットとの交易が盛んであった。香木を始めとするヒマラヤの特産品をチベットに持って行って売り、そこでチベットの品物、例えば岩塩などを買って、今度はカトマンズやネパールの平野部、更にインドまで持って行って商売をしたのである。

1959年にダライ・ラマ14世がインドに亡命すると、チベットに入るのが困難になった。すると北インドやダージリン、ブータンなどに出稼ぎにでる人がでてくる。10代半ばで出稼ぎにいき、ある程度お金が貯まると村に帰ってきて結婚した男性は少ない。村にずっといようというような発想は、若い人の間にはなかったように思える。

1970年代に入ると、ヒマラヤ・トレッキングが盛んになってくる。1953年にエドモンド・ヒラリーがエベレストの初登頂を目指したとき、シェルパ族の助けによって成功したことは有名な話である。それ以来シェルパ族は山登りやトレッキングのガイドとしての有能性が認められ、トレッキング産業に巻き込まれていく。最初は荷物担ぎや食事作りの手伝いをやらされ、慣れてくると次第にトレッキングのリーダーを任せられるようになる。

1980年代になるとトレッカーが増えてきて、ソル地方にも立ち寄るようになる。そうするとお金を貯めた人の中から、村内に観光客用のロッジを作る人がでてきた。ソル地方の中心のジュンベシには現在9軒のロッジがある。流行っているロッジも客の来ないロッジもあるが、ロッジ産業というのは村にとって大きな収入源になっている。

外部とのつながりというと、外国人の協力・援助もこの地域に大きな影響を与えている。先ほど述べた登山家のヒラリー卿は、世話になったシェルパ族の生活環境向上のために情熱を傾けた。環境と医療と教育という現在のNGO活動の柱になっている分野を最初に手がけている。まず、環境面ではエベレストの周囲をサガルマタ国立公園と認定させ、森林利用の制限を行う。医療面では病院のほかにヘルスポストをつくり、薬品などを援助し、更に教育面では学校を建設していった。

ジュンベシには1964年に小学校が建てられ、1978年には高校まで拡大される。ヒマラヤの最奥部に立派な校舎と優れた教員のいる学校が建っているのは驚異的である。1980年代に入ると高校卒業資格のための国家試験に合格するものも出てくる。これによって、カトマンズの大学に進学できるようになり、このころから大学を目指す若者がでてきた。彼ら

の大半は大学の勉強が終わると、故郷には戻ってこない。

また、行政と社会も大きく変化している。1993年に森林法が改正され、集落や親族で共有していた森をいったん国有化し、それをコミュニティーフォレストという形で森林組合を促進する政策がとられた。このような欧米的発想は、森林を管理していたそれまでの秩序体系を崩していく。というのは、森林組合の組合長には、若くて経済力もあり、ネパール語ができて外部との交渉能力のある人が選ばれる。そのために、それまでチベット仏教やシェルパ族的な秩序で権威のあった人々が排除されることになる。その結果、世代や世界観の違いで村落内部に新たな軋轢や反目が出てくるのである。1995年には警察署が設置され5人の警官が常駐するようになった。

社会の変化というのは一般に急激に起こるのではなく、個々の人々の選択と様々な出来事が重なりながら、徐々に変わって行くものである。例えば、小学校ができて子どもたち全員がすぐに学校に行くわけではない。チベット寺院も残っており、学校教育の補完的な役割、すなわち学校に行けなかった子どもたちを救う働きをしている。チベット寺院は、更に養老院のような機能も兼ね備えている。配偶者を亡くして一人きりになった老人でもお寺に行けば、とりあえず食べるものの心配はしないですむからである。

新しい現象や状況が入ってくると、それにすぐに飛びついて適応する人と、伝統的な従来の仕事や生活のやり方を守っていく人がいる。その両者がしばらくは村の中に共存し、やがて一つの流れの方が大きくなっていくというのが社会の変化の一般的な姿である。

ネパールのいたるところで見られる一番大きな変化は、地域のハイブリッド化とも呼べる現象である。ジュンベシの村も1960年代までは、シェルパ族しか住んでいなかった。そこに学校の先生、警察官、あるいは郡政府の役人など、民族の全く異なった人が村に入ってきた。そのようなシェルパ族以外の人々が村に住みつくことで、当然ながら従来の秩序体系とは異なる状況が生まれてきた。このように、行政機構が浸透し、教育やマスコミを通じた国民国家形成が一方で進むとともに、文化のハイブリッド化が個々の村に大きな影響を与えつつあるのが現状である。

6. おわりに - 「最貧国シンドローム」と「ヒラリー・シンドローム」

ネパールのことを「最貧国シンドローム」に陥っていると指摘したのは、文化人類学者のドール・バハドール・ビスタである。それはネパールが「貧困」を取引の材料に使ってきたことを指摘している。外国人たちがよく行くトレッキング街道といわれるところでは、

小学校の先生が「私たちは貧しいので寄付してください。」と寄ってくる。子どもたちも「貧しいから1ルピーちょうだい。キャンデーちょうだい。」と手をだす。

ネパール政府も同じ体質をもち、外国援助にたよって予算をたて政策を実行してきた。外国の方も「ネパールは貧しいのだから協力しなければ」という姿勢をとってきた。このような「貧困」を取引に使っている状況をビスタは憂慮したのである。

「ヒラリー・シンドローム」というのは、先に出てきたヒラリー卿にちなんだもので、愛知県立大学の古川彰氏が最初に言い出した。それは、外国人たちが善意や熱意でネパールの人のためにやったことでも、結果として予想ができなかったような様々な問題が生じてくる、そのような複合的状況を示したものである。例えば、ヒラリー卿が小学校を作ろうとしたとき、結果的には村落の過疎化や高齢化につながるとは考えていなかったはずである。少しでもよい教育を与えようという思いで学校は作られたが、良い学校のできた村から若者たちは都会に出て行って戻って来なくなってしまう。このように援助が社会に与える影響を社会科学的に考えていきたいというのが私たちの立場である。

ネパールでは援助をめぐる問題はまだまだたくさんある。小さなNGO団体がたくさん入っていて、日本人関係者が作った小学校だけでも200近くあると言われている。私のところにも「ネパールの子どもたちは貧しくてかわいそうだから是非学校を作りたいけれどどうしたらよいか。」などと尋ねてくる人がたくさんいる。

今、外国の援助が全く入っていない村は、探すほうが難しいくらいである。よい村長とか校長というのは高い理念や方針を持っている人ではなく、外国人と接触して援助を引き出せる人だといっても過言ではない状況である。外国人に校舎を作ってもらったり、水道を引いてもらおうと、彼らの権威は高まり任期が安定する。彼らはそのために、いろいろな方策を常に考えている（日本の山間中間地が補助金や公共事業抜きでは成り立っていないのと状況は似ている。）

一方、日本人を含めた外国人のほうも、ノスタルジアをこめてネパールの現状に思いを寄せる人がたくさんいる。すなわち、「この貧しさは私の幼い頃を思い出させる。」というわけである。そして、援助活動の中に「生きがい」を見出す人が少なくない。多くの人がネパールに学校を作ってきたが、そのほとんどの人がネパールの教育制度や教育省の方針、教科書の内容などには興味を示さない。「貧しいネパールの子供たちのために私が校舎を建ててあげた。だから、みんな一生懸命勉強して偉くなるのよ。」という雰囲気である。

私たちは援助する人の善意や熱意を否定するものではないし、それらが役に立っていな

いと言うつもりもない。ただ、「援助」という現象がネパールの農村を語る上で無視できなくなっている現状を指摘しておきたい。

環境に規制され環境を利用してきた地域の人々が、行政機構や学校制度、市場経済などの世界的システムに接し巻き込まれ、更に援助という特殊な経済形態に支えられている現状、文化的にもハイブリッド化していく状況を社会科学的に明らかにすることが次の課題の一つであると考えている。

< 参考文献 >

ネパールヒマラヤ地域の自然利用と社会変容に関する最新の研究については、最近刊行された次の文献を参照：

『ヒマラヤの環境誌；山岳地域の自然とシェルパの世界』 山本紀夫・稲村哲也 編著
八坂書房 2000年4月5日

(質疑)

[小松] 農村地帯のジャート間において、「非接触であるが交換をする」という話があったが、より詳細に教えてほしい。

[結城] カースト制度を社会的機能という視点から見ると、その特徴は他のジャートとは結婚しない、他のジャートとはいっしょに食事をしない、そして世襲職業が結びついているというところにある。したがって、人間生活の根幹である結婚、食事、職業という場で、他のジャートとはコミュニケーションをとらないという象徴的意味における「非接触」である。もちろん、日常的に交わることもできるだけ避ける。

ただし、ネパールの場合を補足すると、中間丘陵地帯の人々はほとんど農民である。したがって、カーストの上にいると豊かな生活ができるわけではない。調査のために最下層の仕立て屋のカーストとしばらくいっしょに住んだが、彼らといる限りは非常に快適である。彼らはヒンズー教的規範に厳格にとらわれることなく生きていけるからである。

例えば、最上位カーストのブラーマンは、酒を飲んではいけないし肉を食べることもできない。彼らは米のほかにイモとかマメ、乳製品などを食べている。ところが、一番カーストの下の人には肉を食べようが酒を飲もうが許される。彼らは仲間で生活を助け合っていて、日常的にカースト制度の矛盾を議論しているわけではない。

ただし、公の場では活動が制限される。村の政治や開発はブラーマンを中心にした人々が握っていて、最下位カーストの人の発言力は小さくなる。今、多くの開発実践者が「下位カーストの人たちのエンパワーメント」のようなことを言っているが、下位カーストの人の本音は「そんなことはブラーマンたちにやらせておけばいい。彼らは沐浴したりお経を読んだり面倒くさいことをやっていて、俺たちは肉を食べて酒を飲んでいればいい。」というところにあるような気がする。

[小松] インドとネパール、中央と辺境ということについてだが、この二国はどのような関係にあるのか。

[結城] センターと辺境ということであるが、文明論的には確かにインド = 中心、ネパール = 辺境である。しかし、ネパール人はインドの支配下にあるとは思っていない。ただし、経済的な中枢をインドに握られていることは分かっている。また、政策的にもインドの意向を全く無視できないことは感じている。インド人はネパールに来ても大きな顔をしているし、インドで働くネパール人を蔑視するようなところがある。文明的にも優位

な隣の大国というのは、やはり目障りなもので、インド人を好意的には見ていないと思う。

王制のころ、ピレンドラ国王はネパールを「平和地帯」(ゾーン・オブ・ピース)と設定した。インドからも中国からもなるべく影響を少なくして独自の路線を行こうという意欲の表れだった。1989年にインドによる経済封鎖でネパールは困難に陥ってしまう。ネパールは内陸国なので、港に着いたネパール行きの物資はインドの領域を通してもらわなければならない。

直接の原因はインドとの通過条約の延長に関する問題だったが、それではなく、裏では両国間のいろいろな問題が山積していた。ネパールが反インド的な態度に出るならば、いつでも圧力をかけることができることを、インドは示したわけである。経済封鎖による物価上昇や物資不足は、1990年の王制打倒の民主化運動につながる要因の一つになった。民主化以降のネパール会議派内閣は親インド的政策をとった。このように、インドとは直接は対立できない構図になっている。

[今川] ネパールの産業、特に輸出産業について、現在はどのような状況にあるのか。

[結城] ネパールでも何かを生産して輸出産業を起こそうという動きは当然あった。一時はチベット絨毯がヨーロッパ方面でずいぶん販売された。しかし、中国の安い絨毯が出回るようになると、ネパール製品への需要は落ちてしまった。

内陸国であるので小さくて飛行機でも運べるものということで、一時はコンピュータのソフト産業に力を入れたこともあった。日本の大学の先生や研究者も、だいが協力していたが、結局この分野においてもインドに全く勝てないことが分かって、行きづまってしまった。

今までの外貨収入の大きな部分をイギリス軍の傭兵であるグルカ兵の送金や退役後の恩給が占めていた。しかし、グルカ兵の拠点の一つであった香港が中国に返還されて、撤退せざるをえなかった。

現在の売り物として考えられているのは、観光産業くらいではないのか。1988年を「ネパール観光年」として、ヒマラヤ観光を盛んに宣伝した。地域的に片寄っているとは言え、観光のインフラは以前に比べるとずっと良くなった。

しかし、ネパールの民間企業が輸出産品を生産して大規模に販売しようというような発想や意欲はあまり聞いたことがない。

[柳原] ネパールにおいては「開発独裁」といったアプローチはあるのだろうか。

[結城] 「開発地域」という用語があるが、この用語が使われ始めたのは王制時代であり、そのころの国王の切り札は「開発」であった。伝統的宗教的に国王の正統性を保証するのは、ヴィシュヌ神の子孫や化身ということだったが、近代国民国家を形成しようとする国王は、他のイデオロギーが必要であった。それが、「開発」ということであり、貧しい国民の生活を豊かにする存在としてアピールした。1980年代には、ラジオにおいても新聞においても「ピカス」(開発)という言葉が乱発強調されていた。そのような意味では、国王は一種の「開発独裁」的なものであったかもしれない。

現在でも「開発」という言説は重要であるが、用語自体はあまり意味がない。パンチャヤット時代に「村落パンチャヤット」と呼ばれていたものが、民主化以降に「村落開発センター」(G . B . S .)となったのであり、日本で言えば「行政村」や「村議会」にあたるものである。前述の「開発地域」という名で、国土を5つに分けているが、日本の東北地方の「地方」のようなものであり、実際の行政機構は「アンチャル」(県)や「ジッラ」(郡)の方が機能している。

図表1 総人口・人口増加率

調査年度	人口(人)	増減(人)	年増加率(%)
1911	5,638,749		
1920	5,573,788	-64,961	-0.13
1930	5,532,574	-41,214	-0.07
1941	6,283,649	751,075	1.16
1952/54	8,246,625	1,972,976	2.30
1961	9,412,994	1,156,371	1.65
1971	11,555,983	2,142,987	2.07
1981	15,022,839	3,466,856	2.66
1991	18,491,097	3,468,259	2.10

図表2 カースト・民族・言語 1991年の国勢調査による

		ネパール語割合	
ネパール		18,491,097人	
		50.3%	
言語系統別人口割合		ジャート別人口割合	
先住民族系	6.9%	タルー	6.5%
		ラジバンシ	0.4%
インド・ヨーロッパ語族系 (タライ低地系)	24.0%	上位カースト	5.3%
		商人カースト	1.0%
		職業カースト	10.6%
		宗教グループ	3.6%
		その他	3.5%
インド・ヨーロッパ語族系 (丘陵地帯系)	42.3%	ブラーマン	12.9%
		タクリー	1.6%
		チェトリ	16.1%
		職業カースト	10.7%
		その他	1.0%
チベット・ヒルマ語族系 (丘陵地帯系)	25.9%	マガール	7.2%
		ネワール	5.6%
		タマン	5.5%
		ライ	2.8%
		グルン	2.4%
		リンプー	1.6%
		少数民族	0.3%
		その他	0.5%
チベット系 (山地地帯系)	0.7%	シェルパ	0.6%
		ボテ	0.1%
		その他	0.0%

〔出所〕Population Monograph of Nepal 1995 p.306, p.331 より改訂

(注1) 全国規模の国勢調査は10年に一度実施。次回は2001年の予定。

(注2) 「初-ル語割合」とは各ジャートに属する人で日常語としてネパール語を使っている人の割合。

図表3 ネパール丘陵地帯のカースト

インドのヴァルナ	ネパールのジャート		
	パールバテ系	チベット・ヒルマ系	ネワール
ブラーマン	パフン		ブラーマン/ 仏教祭司(バジュラチャリヤ) 仏教徒(サキヤ)
クシャトリヤ	チェトリ		ヒンドゥー教徒 (シュレスタ・その他)
バイシャ		ネワール マガール、グルン、タマン ボテ(シェルパ)	ジャプー(農民)
シュードラ			職業カースト
指定カースト	パニ・ナチャルネ (仕立て・音楽、 鍛冶、皮革...)		